

オノムラ -能行遺跡第5地点と石斧作り-

1. はじめに

能行遺跡は小倉南区長行西にあり、これまでの調査において弥生時代前期後半～中期の石斧生産集落であることが指摘されている遺跡です。今回はその第5地点で、調査区は紫川の支流である溝尻川の東側 80 m ほどに位置しています。調査は令和3年11月1日～12月24日の日程で面積 1804.99 m²です。

2. 能行遺跡の石斧生産

調査区内には西側を中心に礫層が広がり、これは自然流路の跡だと考えられます。この礫層の中には遺物がほとんど含まれず、その直上に弥生時代を中心とした土器片や石器が散見されました。このことから、この流路は弥生時代にはほとんど埋まっており、基本的に水は流れていなかったと考えられます。

また、礫層直上でみつかった遺物の中には、石斧の未製品や素材と思われる石材、石器作りに使われる敲打具(叩き石)が多くみつかっています。これらの状況は石器工房が近隣に存在していたことを示唆していますが、今回の調査区では確認することができませんでした。

さて、石斧とはその名の通り「石の斧」であり、主に木の伐採・打ち割り・削平に使われる石の刃物です。通常は木でできた「柄」に刃部を付けた石の「身」を取り付けます。斧には金太郎がかつぐ鉞のように刃と柄が併行する「縦斧」と、鋏のように刃と柄が直交する「横斧」があります。

「縦斧」は木の伐採に用いられ、真っ直ぐな棒状の柄の先端に側面から穴を開けて、身を差し込みます。一方、「横斧」は柄の先端が曲がっており、この部分に紐で縛るなどして身を取り付けたものです。こちらは木の表面を削るなどの木材加工に使用されたと考えられます。

今回確認されたのは「太型蛤刃石斧」と呼ばれる縦斧で、刃部がハマグリの貝殻の先端に似ているため、「蛤刃」と呼ばれています。米作りなどとともに朝鮮半島から伝わってきた技術の一つと言われています。出土した石斧のほとんどは未製品で破損や亀裂など、何らかの事情で廃棄されたものだと考えられます。

これらには大まかな大きさに整えただけのものから、ほぼ完成品のようなものまであり、石斧の製作工程を見ることができます。古くから石斧の生産遺跡として著名な今山遺跡(福岡市西区)で



遺跡の位置 (1/25,000)



遺跡遠景 (北東から)



調査区全景 (空中写真合成、上が北東)



礫層の直上から出土した石戈（北西から）

は、①粗割、②打裂、③敲打、④研磨の4工程があり、能行遺跡も同様の手順で作られていたと考えられます。

今回の調査では50点ほどが出土し、これまでの調査と合わせると能行遺跡では200点以上の太型蛤刃石斧が確認されたことになります。この周辺では古くから石斧が表採されていたことも考えるとその数はさらに多くなります。

また、能行遺跡の石斧は安山岩質凝灰岩系の石材が多く使われており、市域ではこの石材が下関亜層群と呼ばれる地層から産出されることが知られています。調査区内に広がる礫層の中にもこれらの石材は含まれており、このような転石を利用して、石材を集めていたのかもしれません。

なお、石斧に比べると数は少ないですが、石包丁や石鎌、また石戈とよばれる武器の未製品も出土していることから、石斧を主体としつつ、他の石器もわずかながら、製作していたことがわかりました。

能行遺跡の集落

調査区の北東側には柱穴と溝状遺構を中心とした遺構群が形成されており、詳細な構造や数などはわかりませんが、数棟の掘立柱建物がこの場所に存在していたと考えられます。

また、調査区の東側は、現在、調査区よりも2～3mほど高い丘陵部となっています。溝状遺構はこの丘陵部に沿う様に延びており、これよりも



掘立柱建物と考えられる柱穴群（東から）

丘陵側に多くの遺構が集中しています。このような状況から、集落は周囲より一段高い丘陵上を中心に展開しており、これを取り囲む様に溝が延びていたと想定されます。

なお、これらの遺構からは、弥生土器がわずかに出土しており、石斧作りをしていた人々がここで暮らしていたと考えられます。

3. おわりに

北九州市内では八幡西区の光照寺遺跡（石包丁）、八幡東区の高槻遺跡や小倉南区高津尾遺跡（石斧）などでも石器作りを行っていたことが知られ、これらの遺跡では1000点以上の石器が出土しています。これらの数に比べると能行遺跡の石斧の数は少なく感じますが、集落内で自家消費するには多く、未製品の数に比べ、集落内に完成品が少ないことから、近隣集落などへ流通していたことが想定されます。

弥生時代の集落は基本的には農業を基盤としていたと考えられますが、能行遺跡は標高が40m前後の山あいに位置しており、ここに最初にやって来た人々は集落を切り開くために多くの石斧を必要としていたでしょう。元々は自身のムラのために石斧を作り始めたのではないかと思います。そして、その中で技術が積み上げられていき、それとともに、周辺で石材が豊富に産出されたことで、積極的に石器作りに取り組むようになったのかもしれません。

埋 蔵 文 化 財 通 信

埋蔵文化財調査室では令和3年度に『左近田遺跡2』、『宮ノ谷石棺群』の2冊の報告書と研究紀要36号、年報38を刊行しました。これまでに刊行された報告書等は各区の図書館にてご覧になることができます。

また、イベント情報や最新の発掘情報などはホームページにて公開しています。なお、イベント情報は市政だよりでもお知らせしております。是非、ご覧下さい。

公益財団法人北九州市芸術文化振興財団
埋蔵文化財調査室

編
集
・
発
行

〒803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目1-3
TEL(093)582-0941 FAX(093)582-8970

北九州市市民文化スポーツ局文化企画課

〒803-8501 北九州市小倉北区城内1-1
TEL(093)582-2391 FAX(093)581-5755

発行日 令和4年8月16日

ホームページ

北九州市まいぶん

検索